



TITLE:

<學界展望>中國に於ける清史研究 の状況と今後の展望

AUTHOR(S):

戴, 逸; 小野, 和子

CITATION:

戴, 逸 ...[et al]. <學界展望>中國に於ける清史研究の状況と今後の展望.
東洋史研究 1984, 43(2): 339-369

ISSUE DATE:

1984-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153944>

RIGHT:

學界展望

中國に於ける清史研究の
狀況と今後の展望戴逸著
小野和子譯

清史とは、一六四四年、清が入關して全國的支配を樹立して以來、一九一二年清朝の滅亡に至るまでの二六八年の歴史を指すが、入關以前のヌルハチと皇太極の時代をもその研究範圍にふくめてよいであろう。しかし今ここで紹介しようとするのは、主に一八四〇年の阿片戦争以前の清史の研究狀況である。

清史は我々の時代と比較的近いため、今日の現實の生活とも密接な關係を有している。今日の多くの問題、たとえば外交・民族・經濟・人口・文化の諸問題を深く研究しようとするれば、必らず清代の歴史にまでさかのぼらなければならない。中國の社會主義建設は中國の國情に基いて行なわれなければならないが、國情を理解しようとするれば、清代の研究はなおざりにできないのである。毛澤東主席は、中國の今日を知る爲には、中國の昨日と一昨日を知らなければならないといわれたが、清代の歴史こそ我々の一昨日であり、中華民族史こそ我々の昨日である。偉大な國家と民族は、過去の歴史から智慧を吸収し經驗を總括して更なる前進の助けとするものであつて、清代の歴史は我々にとって非常に重要である。

清代の歴史は、内容が廣範である上、問題が複雑で資料も豊富で

ある。したがってその研究は困難ではあるが、非常に意義深く且つ興味深いものである。

清史は、政治・經濟・軍事・外交・民族・思想文化の各領域をふくんでいて、これらの大きな領域のなかに、さらに多くの小さな或いは具體的な問題をふくんでいる。清代三百年の歴史には未開拓の領域も多く、研究し、認識し、總括することが要求されている。しかも資料が豊富なこと、はてしない大海原の如くである。我われ清史研究者が當面している大問題は、どのようにして貴重な歴史の資料を救い出し、保存し、収集し整理し、出版するかということ、やらなければならない仕事は多く、任務も重い。にもかかわらず人手は少なく、水準も低く、仕事の必要に應じきれないものである。

中國に於ける清史研究は、發展が非常に不均衡である。阿片戦争以後の近代史の部分は、研究者の層も厚く、成果もあがっている。我々は建國以來、ずっと近代史の研究を重視してきた爲、發展も早かった。高等教育機關では、中國古代史・中國近代史・世界史の三つのカリキュラムが並列され、社會科學院も歴史研究所・近代史研究所・世界史研究所の三つの歴史系の研究所を持っている。従つて中國近代史については、研究者の層が厚いのだが、阿片戦争以前の清史は二百年もの年月がありながら、中國古代史の一部分、それも最後の、あまり重視されない一部分でしかなかったのである。この爲、清史研究は、前半に薄く後半に厚いのであつて、發展は極めて不均衡であつた。この情況を變える爲に、既に、一九五〇年代、董老(董必武)が清史を書くべきだと提唱された。一九五九年には周恩来總理の配慮によつて、我が國歴史學界は、清史研究の爲の計畫を樹てようとしたが、實現しないままに終つた。十年の動亂の間、

周恩来總理の指示によって、檔案館は、知識青年の募集を行ない、滿洲語が讀めるよう人才を育成した。四人組粉碎後、とくに第一期三中全會以後、正常化が進んで學界本來の工作が恢復發展して、清史の研究も重視されるようになった。我々は一連の措置をとって近代史研究を推進すると共に清代前期の歴史の研究體制を強化した。五年來、情況は大いに好轉し、一定の成果を上げつつある。

まず研究機構の樹立である。人民大學の清史研究所は一九五八年に成立し、研究員四〇餘名と教授・助教授一五名がいる。この研究所の人数は全國でも最も多いのだが、力量の面でも最も強いというわけではない。研究所は成立してまだ日も浅く、研究員のレベルもまちまちで、書籍・設備・條件ともまだまだ充實と改善が期待されるからである。また、社會科學院歴史研究所にも清史研究室がある。研究人員は二〇餘名で、人数こそ少ないが、歴史も古く、書籍も多く、條件に恵まれていてレベルも高い。この二つの単位はどちらも北京にあって人数も多いものである。その他、第一歴史檔案館の研究室と編集室も、北京にあって、研究の力量となっている。この三つの単位は常に協同して仕事を進めている。

北京以外の各地については、遼寧省社會科學院清史研究室、遼寧大學、吉林省社會科學院、東北師範大學、南開大學にいずれも清史研究機構があり、南京大學、厦門大學にも清代經濟史研究機構がある。但し人数はいずれも一〇人以下で、或るものは清史研究室とよばれ、或るものは明清史研究室とよばれ、其の他の名稱でよばれているものもある。その他、各地の個人で清史研究に従事する研究者は非常に多く、全國の大學と研究機關に散在している。以上が機構と人員の面で増加したものである。

次に學會の開催についていえば、一九七九年以降、北京では毎年、小型の學術討論會が開催されている。國際的あるいは全國的な大規模な學術討論會は三度開催された。第一回は一九八〇年八月、南開大學で行なわれた明清史國際學術討論會である。鄭天挺先生の主宰によるもので外國からも多くの研究者が参加した。第二回は一九八二年八月の北戴河會議である。これは社會科學院、南開大學、人民大學の三單位が發起し主催したもので、参加者は一六〇人、清史の最初の大きな全國的シンポジウムであった。第三回は、一九八三年九月、瀋陽で開催されたものである。社會科學院歴史研究所、遼寧省社會科學院、遼寧大學、人民大學の共催によるものであった。今後この種の大型・小型の會議が絶えず行なわれて研究の成果と經驗を交流することになろう。

最後に、研究成果も増加した。文革以前には國內で出版された清代前期に關する著作・論文・資料は比較的少なかったが、この五年來増加して、著作・資料集は數十點にも達している。不定期刊行物・資料には『清史論叢』、『清史研究集』、『清史研究通訊』、『明清社會經濟史集刊』、『清代檔案資料叢編』、『清史資料』、『清史譯文』等々があって、論文の数も毎年非常に多い。

總じていえば、五年來、清史研究の發展は早く成果も多いのだが、必要性からいえばまだ十分とはいえない。清史研究にはまだまだ空白が多く、意見のくいちがいや未開拓の分野も多いのである。

清史の資料は非常に豊富である。第一歴史檔案館には九六〇萬點の資料がある。臺灣から出版されている清朝の宮中檔は、康熙・雍正・乾隆・光緒の四朝で七四巨冊にもなり、五萬點を收録していると思われるが、國內の檔案館のものはこの二百倍にも及ぶのである。

る。臺灣の宮中檔は七三年に出版を開始し、アメリカの財團の援助を得て一〇年で七四冊を刊行した。その刊行の速度は結構早いのだが、假りにこれと同じ速度で第一檔案館の檔案を刊行するにしても、二千年の時間が必要で、何世代かかっても終わらないことになる。現在、我々は續々と出版してゆくことが必要である。この事業は子孫孫、繼續してやってゆかねばならないだろう。したがって清史の研究には、やらねばならぬ仕事が多く、我々は才能もあり抱負をもった青年たちが、研究の隊伍に加わってくれることを心から願っている。かつて清史の研究者はそれほど多くなかったが、現在では各地で養成する研究生（修士クラス）の人数が増加してきた。清史（前期史）はあたかも開墾を待つ處女地の如きものであって、人々の開發と耕作とを待っている。我々は外國の友人たちがこれに加わって下さることによって、研究の速度が早められることを希望すると共に、外國の資料整理の先進的方法から學びたいと考えている。以上が機構隊伍と工作の情況である。

以下、數年來の清史に關する重要な研究テーマと論争とをごく簡単に紹介する。

(1) 入關前の滿洲族社會の性質に關する問題。入關前の滿洲族の社會經濟の發展はどのレベルに達していたか。これについては様々な意見がある。或る人びとは滿洲族は早くから封建社會に入っていたと考えている。滿洲族は女眞の後裔であるが、女眞は金王朝を建て既に封建社會に入っていた。東北に留まっていた女眞の一部（建州女眞）も明朝になって封建社會に入った、と考えている。また或る人びとは滿洲族は入關前ずっと奴隸社會に留まっていた、或いは

原始社會から奴隸社會に入つたばかりだと考えている。二つの意見、推測、評價は異なっている。私の初步的な見解では、ヌルハチの初期、滿洲族はまだ奴隸制の末期にあって、當時のトクソ（農莊）は奴隸莊園に近かった。一六二一年（天命六年）、滿洲族は遼陽・瀋陽地方を占領したが、この地方はもともと漢人が多く住んでいて封建社會の段階に入っていた。滿洲族はこの地方に入って先進的な生産形態に適應し、これを採用して封建化の速度を早めた。つまり入關前の滿洲族は丁度初期の封建社會にあったのだと考えている。目下この問題は論争中である。

(2) 南明の清朝に對する抵抗をどの様に評價すべきか。一つの意見は、滿洲族は中華民族の大家庭の一員であつて當時にあっては新興の、生氣勃勃たる力量を持っていた。したがつて清朝が、すでに腐敗していた明王朝にとつて代つたのは進歩であり、南明の抗清は歴史の潮流にさからうものだ、とするものである。これに對して今一つの意見は、清朝はまだ遅れた生産形態にあり、その入關は、殺戮・破壊を伴つて中國の進歩を阻碍した、というものである。二つの考え方は完全に異なっている。私個人の意見は以下の如くである。清朝が新興の力量だとはいひ難い。なぜならその社會の發展段階はまだ封建制の初期にあり、漢民族の社會に比較して先進的ではなかった。入關初期に實施した政策も、圈地・逃人法・禁海令の如きおくれたもので、殺戮や破壊も相當ひどかった。漢民族に服裝や習慣を變えるよう強制したのは、民族的抑壓であり、漢民族が立上つて抵抗したのは自衛の爲の鬭争であつて、漢民族人民の反抗の正当性を認めるべきである。しかし入關後、清朝は強い抵抗に遭遇して徐々に政策を改め、民族的抑壓を緩和しておくれた政策を放棄し

た。順治四年には大規模な圈地は中止になり、清朝内部に若干の矛盾はあったものの、比較的順調にこれらを解決した。彼らの戦闘力は強く、効率もよかった。一方、南明政權の側は、内部的に腐敗して派閥抗争もひどく、各方面の力を結集して清朝に抵抗することができなかった。この爲、滿洲族は清初の長期にわたる闘争を経て前進して自らの落後性を脱し、南明の側は後退した。これが清朝の勝利の原因である。三藩の亂の時、すでに全國の支配を確立していた清朝に、吳三桂らが立上って抵抗したが、形勢はもはや以前とは同じでなく、漢民族人民の支持を獲得することができなかった。吳三桂の抗争は何ら進歩的な活動ではなく肯定に値しない。

(3) 中國の封建社會は何故長期にわたって停滯したのか。これも亦た清史研究における大問題である。ある人はいう、中國は以前には世界の先進的な國家であったが、清朝になって遅れた。これは清朝の政策による所、大である。清朝の専制主義、商工業抑壓政策、鎖國政策、文字の獄などが、社會の停滯と落後性を將來したのだ、と。私の考えでは、中國の停滯と落後とはたしかに清朝の政策と關係があつて清朝の支配者にも責任がある。しかし停滯の原因はもっと複雑で根の深いものがある。なぜなら清朝の多くの政策は、個人の產物ではなく、中國社會の未發展を反映したものであつて、このような制度や政策は中國という土壤から生まれたものだからである。政策というのは社會の發展に對し巨大な役割を果しはするが、その政策自體が、當の社會狀況によつて規定されたものである。社會狀況の如何が政策の如何を決定する。清朝が遅れた政策をとつたのは、中國の封建社會の停滯と安定の特長を反映したものである。この問題は大きな複雑で、我々は今後さまざまな角度から考えてゆかなければ

ばならない。清朝の政策はたしかに中國の立ち遅れをもたらした一要素ではあるが、ほかに、經濟の要素、政治の要素、思想文化の要素、さらには地理的環境、人口の要素等をも考慮し、総合的に考えてゆかなければならないのである。これは簡単にわりきれぬ問題ではないので、更に深く全面的に検討することが必要となる。

(4) 資本主義の萌芽について。文化大革命以前、この問題は非常に議論されたテーマであつた。最近さらに多くの新しい文章が發表されつつあるが、或るものは資本主義を高く評價し、或るものは低く評價し、議論は盛んで簡單には片づきそうにはない。或る評價は非常に高い。清代、資本主義は封建主義にとつて代つた。手工業・商業のみならず、農業に於いても資本主義が起り、ブルジョワジー・プロレタリアートも既に出現して、資本主義の要素は生活の各方面にあらわれていたという。又た別の意見はこれとは逆に、資本主義の萌芽は存在していたけれども非常に微弱で存在しないに等しかった、社會に對しても何ら影響をもっていなかった、という。私は大體、折衷的な考えである。資本主義萌芽を過度に評價することはできない。もし阿片戦争以前に、中國が資本主義への過渡期にあつたとしたならば、近代史に於いて資本主義の發生がなぜこれ程多くの困難に遭遇しなければならなかったのだろうか。また資本主義萌芽に對する評價が低すぎるものについては、經濟生活にあらわれた新しいものをこの様に完全に抹殺してしまうことは適當でないと考ええる。當時、資本主義萌芽は非常に微弱で濃厚な封建的殘滓をとまなつてはいたが、その性質は既に異なつてきており古いものと同一視はできない。この方面での論争は非常に多く、數年來、資料も多數發表されて、研究は一層深く具體的になつてきている。

(5) 民族問題。我が國は多民族を統一した大家族國家である。これは清代に最終的に形成されたものであり、現在の疆域も亦、清代に最終的に劃定されたものである。清代の民族關係、民族政策及び邊疆地區に於ける經營管理は非常に重要な問題であり、我が國歴史學界の注意してきた中心的な事柄である。この數年來、この方面での論文は非常に多い。

我々は亦、國內の民族鬭争にも注意している。特に清朝の對ジュンガル・蒙古との戦争は康熙から乾隆に及び、中斷はあったものの延綿七、八十年にも及んだ。中國に對する關係は深く、新疆・蒙古・西藏・青海・甘肅・寧夏の多くの地域と民族にも影響を与えた。また我々は民族間の交流、經濟・文化上の往來、邊疆地區の經濟の開發にも注意している。清代、邊疆の經濟・文化の發展は早かった。清朝の少數民族に對する政策が成功した面があればこそ、多民族國家の統一の強化に寄與したのである。民族史の研究においては、文字資料が大きな問題で滿洲語・蒙古語・チベット語・ウイグル語をマスターし、少數民族の史料を利用することが必要だが、この方面では立ち遅れていた。現在、國內に保存せられている少數民族の文字資料は大部分、清朝の時期のものである。その他、外國語の資料を利用する必要もでてくる。我々は既に六十餘點の外國語の資料を翻譯し出版した。これらはすべて民族問題と邊疆問題に關するもので、うちロシア語のものが最も多く、英文のものがこれに次いでいる。日本語のもの、例えば閑宮林藏の『東疆紀行』などもある。彼は十九世紀初、北海道から庫頁島（サハリン）に行き、黑龍江に沿ってさかのぼり德楞地方まで行った。そして費雅略（イリヤク）・赫哲（ヘジェ）・鄂倫春（オロチョン）族などの生活狀況につ

いて述べるとともに清朝のこの地方に於ける徵稅管理・貿易情況についてもふれている。

(6) 文化思想 この方面での成果は非常に多い。集中的に幾人かの重要な思想家、王夫之・顧炎武・黃宗羲・顏元・戴震等を研究した。今年（一九八三年）上半期には、湖南で王夫之學術討論會が開催され、下半期には揚州で段玉裁・王念孫の學術討論會が開催された。思想文化の研究についても異なった意見がある。乾嘉學派の評價については、過去の評價は非常に低かった。その煩瑣主義が批判され、現實を離れ小さな問題に精力を浪費したものとされてきたのである。最近では評價は稍高くなって、その缺點を指摘する際にも、それが古籍整理の上で果した貢獻を肯定し、その方法に一定の科學的要素のあったことを肯定する様になってきている。しかし清代學術の研究というのは相當むつかしいテーマである。理論的な面での教養と高度の哲學的分析能力が要求せられるし、一方では亦た經學や小學についての基礎が要求されるからである。

以上、六つの問題について話してきた。他にも問題は多いが、詳細の餘裕はないので簡單にふれておきたい。

對外關係については、イエズス會の宣教師が中國に來て數百年になる。その果たした役割をどう評價するか、阿片戰爭前、中國は鎖國政策をとってきたが、この政策の形成についてどう評價するか、又た清代の宗族制度についてどのような特長があると考えるか等々。

その他、清代の商業については、過去には研究が少なかったが、現在では、清代の大商人、票號や農村の集市貿易について研究している研究者がいる。政治史の方面でのテーマはさらに多い。清代の何人かの有名な人物、ヌルハチ、皇太極、康熙帝、雍正帝は注意せね

ばならない重要人物で、その傳記がすでに出版されたものもあれば、準備中のものもある。農民戦争については、白蓮教、天地會について資料が編集され、多くの論文が書かれた。

この他の専門領域も清史と關係がある。たとえば圓明園研究會、避暑山莊研究會は、建築、園林、歴史、文物などの専門家から成っている。他にも文學、藝術、科學技術から書畫、醫學に至るまで、清史と關係をもつものは非常に多い。したがって清史の研究機構は、各方面の人才を必要としているし、個々の研究者も専門の領域以外にかなり廣い知識をも必要とするのである。こうしてこそ工作の必要に答えることができるし、研究の質を高め、高度の學術水準に到達できるのである。

以下、今後の清史研究の展望について述べよう。

去年（一九八二）、我が國は第六次五箇年計畫（一九八一～八五、以下六五計畫と略稱）を公布したが、この計畫には哲學・社會科學がふくまれていて、歴史學も入っている。この計畫は哲學・社會科學を國家計畫のなかに入れた最初のものである。現在、我々の政府は、非常に哲學・社會科學の發展を重視し、文書のなかで「哲學・社會科學の發展なしには社會主義の現代化を實現しようとしても不可能である」と指摘している。

如何にして社會科學の長期計畫を制定するのか。我々はまだ経験がないが、何度の討論を経て以下の如く考えるに至った。國家計畫のなかで重大且つ有意義で社會主義建設にとって最も重要な項目をしっかり把握しなければならない。又た同時に研究條件即ち研究者・設備・圖書・資料にも注意し、期限通り、質を保持しつつ項目を完成できるかどうかにも注意しなければならない。國家計畫はあ

まり多すぎてもいけないので、少數の項目に精力を注ぐことが必要である。輕重緩急とにらみ合わせつつ、研究者と研究費を重要なテーマに集中しなければならない。またその一方では擔當する單位、人員、各方面の條件を考慮し、計畫が制定後りっぱにやってゆくことができ、完成できるようにしなければならない。又た、計畫を制定し項目を確定するにも、必要性と可能性とを結合させて考えることが必要である。

歴史學の方面では、中國古代史、中國近・現代史、世界史の三分野をふくむ、合計三十餘の項目を決定しているが、このなかでは清史に關するものが非常に多い。以下の如くである。

(1) 清代通史と人物傳。社會科學院の歴史研究所と人民大學清史研究所が中心になり、その他の單位も參加している。

(2) 明清檔案の整理。第一歷史檔案館が中心である。

(3) 明清時代の廣東地區の經濟の研究。中山大學が中心である。

(4) 明清時代の福建地區の經濟の研究。廈門大學が中心である。

その他、清史に關係するものがいくつかある。

例えば中國近代史の計畫のなかで非常に多いのは清末の歴史に關するもので『中國近代史稿』、『中國近代經濟史』、『中國近代經濟史資料叢刊』、『孫中山選集』の出版等である。このほか地方志の整理もある。現存の地方志は、大部分、清朝の時代に書かれたもので清史との關係が深い。

次に全國的な歴史學の計畫について私の知見を述べよう。

(1) 全國の歴史學計畫會議（一九八三年五月、長沙に於いて開催）に於いて、歴史科學發展の方向、展望、重點について討論を行なって計畫を立て、研究機構の擴充、研究者の養成、圖書資料及び

研究費について討論してやや具體的な措置を講じた。このことは歴史科學發展の非常に大きな推進力となるであらう。

(2) 我が國の研究項目は、いくつかの段階に分れている。學校や研究所の所管に屬するものもあれば、省・市の所管に屬するものもあり、國家の所管に屬するものもある。國家項目のうち、歴史に關するものは三十餘項目のみであるが、省・市・學校の項目は非常に多く數百項目に及ぶ。各段階ごとに責任を負い、各段階ごとに管理している。重點もあれば、全體についての配慮もしている。國家項目は少數にならざるを得ない。

(3) 國家項目については、研究者・研究費・圖書資料の面で援助し、全國的な力を結集してその速度と質とを保證している。

(4) 國家項目の達成の爲に、各項目毎に、學術上の責任者が決められ、項目毎の要綱、詳細な計畫、質の規定と完成時期についての議定書が交わされ、責任の所在を明らかにした上で、質を保證しようとしている。現在、すべての項目はようやく緒につき始めたばかりで経験がないから、果してうまくやれるかどうか、どんな困難にぶつかるかは十分わかっていない。我々は摸索しつつ前進し、経験を積んで仕事を順調に發展させたいと願っている。私は清代通史と人物傳の編纂に参加し、これらを書き上げたいと考えている。一九九〇年に基本的に完成し、全部で三〇卷になる豫定である。

通史と人物傳の編纂は稍や異なる。通史は比較的少數の者が書き、卷毎に、要求の範圍、大綱を決め、分擔執筆して何人かが編纂に當る。一卷、二三人もしくは三〜四人である。通史を書くのに執筆者が餘りに多すぎるといふのは適當ではない。人物傳は、多少分散してもよいので、多くの人を組織して執筆に参加してもらつて

いる。我々の方法は以下の如くである。二千餘の人物を列擧して、全體の要綱、體例、字數を決め、全國の清史研究者に割當てる。多量のものでは一人で十數人、少ないもので一、二人の人物の執筆を擔當し、書き上げてから編集委員會に集めるといふものである。現在、人物傳は既に一部を書き終えた。人物傳の第一卷は比較的早く出版されることになる。しかし通史についてはまだ提綱を討論している段階で、出版は數年後のことになる。一九九〇年には通史、人物傳二〇卷以上を完成したいと考えている。少數の卷については一九九〇年に以降に完成するということになるだろう。

清代通史と人物傳について、最も苦心しているのは、どのようにして質を保證するかである。三〇卷という大部なものではあるが、數年以内にやり終せる分量でなければならぬ。しかし出來上ったものの質、比較的高いレベルに達しうるかどうかは大きな問題で、ある卷は比較的上まう書けているが、ある卷は稍劣るということもおこるだろう。清史については、まだ具體的な専門研究の進んでいない分野も多いので總合的な通史を書くには多くの困難がつきまとう。我々の利用しうる研究成果は決して十分とはいえない。この爲、我々は研究しつつ資料を整理し、通史を書かなければならないのであつて、困難は非常に多く、時間もある。しかも全體で三〇卷であるから、うち一卷だけが遅れることは許されない。研究せねばならぬ問題は多く整理せねばならぬ資料は多い。具體的問題についての研究が完了し、資料が整理されてから通史を書き始めるというのなら、待つこと久しくして通史は永遠に完成しないということになる。

しかし一方ではすぐに通史を書けない事情もある。多くの問題が

まだ解決していないから研究の過程で多くの重要な資料をまず一部整理せねばならない。こうしなければ通史の水準を高め、質を保證できないのである。

歴史學の全國的な計畫はまだ完全なものではないが、進行の過程で修正され或いは補充されてゆくであろう。我々はこの計畫を通じて全國の歴史研究工作进行を促進できることを期待している。計畫に入られた國家項目はわずかだが、全國には省・市クラス或いは學校クラスの項目が非常に多くある。國家項目とその他の項目とが相俟って、相互に援助しあわなければならないし、同時に又た相互に競争しあつて「趕、超、幫」（追いつき、追いこし、助け合う）の活動が展開できる。國家項目以外の項目が、速度の上で、あるいは質の上で國家項目を凌駕することも十分にありうることである。今後、我が國の哲學・社會科學方面では、優秀な科學上の著作に表彰したり、獎勵してゆくことも必要である。表彰されるのは、國家項目や重點項目のこともあろうし、各地の項目であることもあろう。これには項目に参加した人の努力を評價してゆくことが必要である。

社會主義制度の下では、科學研究工作に於ける計畫性を保證し集團主義の精神によつて人びとの積極性と主觀能動性を刺激し、發揮させることができる。何次かの五箇年計畫が終つた暁には、我が國の歴史科學は大いに發展し、清史研究も面目を一新することになるであらうと期待している。

譯者附記

これは、一九八三年一月八日、戴逸教授（中國人民大學教授・清史研究所長）が京都大學人文科學研究所「明代の政治と社會」

研究班で行なわれた講演の原稿に、教授自身が若干、加筆されたものである。